

◎提出日は、授業担当より連絡します。

【本文】

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉は①けしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、②はかない言葉の、③にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、歌のことわり、まことの歌詠みさまにこそ④はべらざめれ、口になかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌の詠まるる⑤なめりとぞ、見えたるすぢにはべるか。⑥恥づかしげの歌詠みやとおぼえはべらず。

【現代語訳】

和泉式部という人は、実に趣のある手紙をやりとりした(人です)。けれども、和泉は(日常生活で) ① (一面があります。ですが、気楽に手紙を書き出した時に、その方面(文章)の才能のある人で、) ② (言葉の、) ③ (も見えるようです。和歌は、たいそう興深いもの(です)。古歌についての知識、歌の理論などは、本当の歌人の詠みぶりでは) ④ (一節の、目にとまるのを詠み添えてあります。それほど歌人でも、人の詠んだ歌を非難し批評している場合には、いやいや、それ(人の歌の批評ができる)ほど、和歌の道に精通してはいないだろう、口先ですらすらと自然に歌が詠み出される) ⑤ (と、すぐにはわかってしまうようなたぐいの人なのですね。(⑥ (とは思われません。

【空欄の現代語訳】

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥

【紫式部は、和泉式部をどのように評しているか】

【本文】

丹波の守の北の方をば、宮、殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひはべる。⑦ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゆしく、歌詠みとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりには、⑧はかなきをりふしのことも、それこそ⑨恥づかしき口つきにはべれ。ややもせば、腰はなれぬばかり折れかかりたる歌を詠み出で、えもいはぬよしばみごとしても、われかしこに思ひたる人、にくくも⑩いとほしくもおぼえはべるわざなり。

【現代語訳】

丹波の守(大江匡衡)の北の方を、中宮様や殿などのあたりでは、匡衡衛門(赤染衛門のこと)と言っています。歌は() ⑦ (、実に由緒ありげで、歌人だからといって何事につけても歌を詠みちらすことはしません、世に知られている歌はみな、() ⑧ (折の歌でも、それこそ() ⑨ (詠みぶりです。それにつけても、どうかすると上の句と下の句が離れてしまいそうな腰折れがかった歌を詠み出して、何ともいえぬ由緒ありげなことをしてまでも、自分こそ上手な歌詠みだと得意になっている人は、憎らしくもまた() ⑩ (。)

【空欄の現代語訳】

- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩

【紫式部は、赤染衛門をどのように評しているか】

【「腰折の歌」とは、どのような和歌か】

◆才女批評と和泉式部



スナキな恋文を書くと、感心できない点もありますが、歌は妙言事、知識や本格的な風格はありませんが、必ずしも「おぼえ、一言がきこえられていまい、しかし、ひげ目を感じるほどの歌人ではありません。

恋多き女、恋に生る

和泉式部

人妻でありながら皇族の男性と不倫。しかも兄と弟と。ちょっとスキャンダラスな恋多き、愛に生きる女

ニキがは、この人、あんなり、女、さかた、よ、う、な、り。

【本文】

清少納言こそ、⑩したり顔にいみじうはべりける人。さばかり⑫さかしだち、⑬真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行く末⑭うたてのみはべれば、⑮艶になりぬる人は、いとすごうすぎるなる折も、ものあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、⑯おのづからさるまじく⑰あだなるさまにもなるにはべるべし。その⑱あだになりぬる人の果て、⑲いかでかはよくはべらむ。

【現代語訳】

清少納言は、()をしてひどくえらそうにしていて人(です)。あれほど()、()、()を書き散らしています程度も、よく見れば、まだひどく足りない点が多い。このように、人とは違った特色を見せようと意識的にふるまう人は、必ず見劣りし、将来は()、()になっていくばかりですので、風流ぶることが身についてしまった人は、たいそう寂しくてつまらない折も、何となくしみじみと感動しているようにふるまい、興あることも見過ごさないようにしているうちに、()、()、()、()あるべきではない()、()にもなるでしょう。その()、()の最後が、()、()。

【空欄の現代語訳】

- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮ 「艶になりぬる人」訳
- ⑯
- ⑰
- ⑱

【紫式部は、清少納言をどのように評しているか】

Blank box for writing the answer to the question above.

※スタディサプリを使って

古文の問題演習にも、取り組んでみよう。

★日記の他の部分も読んでみよう！

【本文】

秋のけはひ入りたつままに、土御門殿のありさま、言はむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるに、もてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもて隠させたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

【現代語訳】

秋の雰囲気は漂うにつれて、土御門殿の(屋敷の)様子は、いいようもなく趣がある。池のあたりの(木々の)梢や、遣水のほとりの草むらは、それぞれが一面に色づいて、空全体も優美なのに引き立てられて、不断の御読経の声々は、いっそうしみじみと感じられることであつた。次第に涼しく感じられる風の気配に、いつもの絶え間ない遣水の音が、夜どおし読経の声と入り交じって、区別がつかないように聞こえてくる。

中宮様も、近くにお仕えしている人々が、とりとめもない話をするのを、お聞きになりながら、(九か月の身重のため)さぞ大儀でおいであるうに、さりげなく装っていらつしやるご様子などが、(ご立派なことは)今さらいうまでもないことだけれど、つらいこの世の心の慰めには、このような中宮様をこそ探し求めてお仕え申すべきであつたのだと、日常の沈みがちな心とはうって変わって、たとえようもなくおのずとすべてを忘れられるのも、一方では不思議なことである。

【紫式部の性格を想像してみよう】

Blank box for writing an impression of Murasaki Shikibu's personality.

◆才女批評(赤染衛門)



最高級というわけはありませんが格調高い歌風です。ちよつとした時に詠んだもので、「頭の下がる」「頭の下がる」詠みごはりです。

恋多き和泉式部とは正反対の夫につくす妻 良妻賢母型

ミナガワ 好 悠 大 9412P

マヤ 小池 裕子 (角川)



この人の夫は漢学者で 匡衡

匡衡をよろしく 清き一票を

夫の出世のため 匡衡を 呼ばれて います

匡衡と 匡衡は 匡衡を

匡衡は 匡衡を

匡衡を 呼ばれて います